No.66
2017.8

世田谷文学館ニュース
SETAGAYA LITERARY MUSEUM NEWS

館長の作家対談
小池昌代（詩人・小説家）

澁澤龍彦　フランス　サドの城のあるラコストにて　1977年

収蔵品のご紹介　福田純監督書き込み入り『ゴジラ・エビラ・モスラ 南海の大決闘』台本
2016（平成28）年度世田谷文学館事業報告

館長の作家対談

ゲスト
小池昌代
（詩人・小説家）

聞き手
菅野昭正
（世田谷文学館館長）

詩をはじめ、小説、エッセイ、翻訳、『池澤夏樹＝個人編集 日本文学全集』の百人一首現代語訳など古典詩歌の訳や解説でも活躍されている小池昌代さんをお迎えし、当館館長がお話を伺いました。

小池昌代（こいけ・まさよ）
詩人・小説家。1959年東京都生まれ。津田塾大学国際関係学科卒業。卒業後、法律雑誌の仕事に携わる傍ら、「詩とメルヘン」、「抒情文芸」、「ラ・メール」などの詩誌に投稿。88年、第1詩集『水の町から歩きだして』刊行。89年にラ・メール新人賞を受賞。97年刊行の詩集『永遠に来ないバス』で現代詩花椿賞を受賞。99年、詩集『もっとも官能的な部屋』を刊行、同詩集で高見順賞を受賞、さらに2008年刊行の『ババ、ババサラ、サラバ』は小野十三郎賞、10年刊行の『コルカタ』は萩原朔太郎賞を受賞など、現代詩で最も活躍している詩人の一人。散文でも多くの著作があり、01年刊行のエッセイ集『屋上への誘惑』で講談社エッセイ賞を受賞。07年刊行の短編集『タタド』の表題作は川端康成文学賞、14年『たまもの』は泉鏡花文学賞に選ばれている。他にも絵本翻訳、古典詩歌の現代語訳や解説、新聞の書評委員など幅広い文学活動を行っている。

水の町から

菅野▼最初の詩集『水の町から歩きだして』で存じ上げましたが、深川のご出身だそうですね。

小池▼深川生まれで、30歳くらいまでおりました。祖父の頃から木場で材木屋を営業していまして、父も継いでおりました。

菅野▼木場でお育ちになったことで、地域の文化の特色について幼い頃からいろいろなことを感じてこられたと思いますが、今でも詩を書く時それが自然に出てくるとか、意識的に題材にするとかは、ありますか。

小池▼もう離れて長いのですが、やはり生まれた土地というのは染みこんでいますね、人間の底にというか。幼年時代と詩がどこかでつながっている気がしてならなくて。詩をやり始めようと考えた時が、幼年時代の何かの記憶と結びついていて、本当に子どもの頃に決めていました。なぜ、発端が詩だったのかは自分でも分からないんです。

菅野▼詩を書こうと思われた動機というと、どんなことがありましたか。

小池▼父も本当は文学とか小説を書きたかったようですが、商家の長男で、祖父を早くに亡くして材木屋をやらざるを得なかった。家には文学全集などが残っていて、残骸としての文学みたいなものを何となく見て育ちましたが、本の世界から入ったというより、外の世界と自分との関係の中に詩という要素があったとしか言いようがないのです。水の面を飽きずに見ていたり、自然といっても植木鉢の自然だったり、おばあちゃんの声、うるさいことを言う声、いろいろな店の人の声だのの喧噪の中で、いつしかそういうものを言葉にしたいという気持ちが生まれてきたようにも思います。

菅野▼詩を初めて書かれたのはいつ頃ですか。

小池▼詩を外に向けて出したのは、遅いのですが26、7歳です。ただ、詩という言葉を意識して、詩をずっとやっていこうと思ったのは6、7歳の頃です。なぜ詩という言葉がぴょんと入って来たかは分からないのですが。

菅野▼童謡ではなく、詩ですか。

小池▼そうです。本屋さんに行っても詩と絵とか、詩と文学とか、詩という漢字がタイトルに入った本がパッと目につきました。漢字一つに自分にとって何か大事なものがあると思い込んでいて、子どもの頃から将来は詩をやる人になろうと思っていました。実際に詩を書けたのは遅かったのですが。

菅野▼小池さんが書き始められた時代、女性の詩の基礎的な風土、詩の起源になるものは、叙情性だったと思います。いろいろな物象に触れて、喜怒哀楽あるいは感動を歌うということですね。小池さんの詩はそれとはだいぶ変わってきて、存在論的な感じがする。例えば、『もっとも官能的な部屋』のJの部屋。その部屋にいる時は存在しながら、ここにはいないような感じがある。そこから出て行くと今度は、自分はあの部屋に存在しているのではないかと、存在と不在が交錯するところから詩が生まれている気がします。存在の中の不在、あるいは不在の中の存在。

小池▼本当にそのお言葉が嬉しいです。存在論という言葉を出してくださった方は菅野さんが初めてだと思います。仰るように、私は叙情というところから少し離れたものを詩に盛り込みたいという気持ちがございまして。

菅野▼小池さんの詩は湿っぽくなくて、乾いた詩だという感じがします。もちろんそうでないものもありますけど。

小池▼水分を少し蒸発させて乾かして、世界と対峙するような、何かそれこそ存在論的なものを詩に入れたいという気持ちはありました。哲学的な思考をするのが好きというか、考えるのが好きというか、そういうところはあります。

菅野▼感覚の詩というより思考の詩という面があって、女性の詩の中では際立っています。無論、感覚が鈍いという意味ではないですよ、感覚の鋭さがないと思考の場には入っていかないですから。もう一つ感じるのは、誰しもごく普通の生活の中で、ある瞬間に生活の中の断面というのか、非日常的な断絶がおこることがある。小池さんの詩は、そこから生まれることが多いのではないですか。

小池▼生きているという状態でいろいろなものを見ていく中で、案外、当たり前のものが、詩に書いてみると何か一番面白い風貌を表してくるというか。特に、失敗とか、ミスとか、誤植とか。ずれるというか、うまくいかないことのほうに面白いものがあったり。なめらかに何でもいってしまうと隠蔽されて分からないけれど、生きているとちょっと亀裂が入るような瞬間が幾つかあって、それが書きどころになっていく気もします。

菅野▼『永遠に来ないバス』という題は実に上手だなと思いますが、「永遠に来ないバス」という一句がスッと出てきたわけですね。バスを待ちながら、永遠に来ないのではないかという感じがあって生まれたのですか。

小池▼それこそ存在論ではないですが、何でバスは待っていると来るのだろう、何で皆こんなことを信用して生きているのだろうと思いまして。時刻表一つの約束で、皆それを信用して待っている。しかしバスは、多少遅れてもやっぱり来る。それが奇跡のような気がして、不思議でならない時がありました。

菅野▼あの詩集の題を見た時、すぐ思い出したのがベケットの『ゴドーを待ちながら』でした。

小池▼大好きです、『ゴドーを待ちながら』。

菅野▼あれは、ゴドーは来ないだろう、来るはずはないけれど、やっぱり来てほしいという陰画的なサスペンスのドラマです。小池さんの詩は少し違って、バスは永遠に来ないのではないかという不安がある、これは日常生活の亀裂の瞬間ですね。本当に来なかったら困るけれど、そこで亀裂にはまり込んで、この亀裂が永遠につながるのではないかという不安があって。それが暫くしたら、向こうから黄色だか緑だかのバスが…

小池▼やって来て。

菅野▼やって来る、現れてくれる。その現れてくる時のイメージが、待っているけど来ないのではないかという不安があっただけに、とても新鮮。そういう組み合わせにとても感心しました。その後、乗ってみたらいつもどおりの生活に戻っていく、次の駅、次の停留場へ着く。名作だと思います。

小池▼よく読んでくださって、感謝です。『永遠に来ないバス』を書いた時は『ゴドー』をまだ観ていませんでしたが、観て、世界が変わるぐらい救われました。ああ良かった、これがあってと。私が観に行った時はいろいろな年齢の人がいて、この人たちはこうして何度も何度もこれを観に来たのだろうなと思ったら、嬉しくなって。文学はこうやって、長い時間をかけていろいろな人たちが作っていくものなのだと、そういう厚みを感じられるというのは、得がたい経験でした。

古典の深さ、現代語訳の難しさと面白さ

小池▼厚みや歴史に関わるかと思いますが、最近、文学全集で百人一首を現代語訳にと申しつかって担当いたしました。今までは古典をただ読んでいただけだったので本当に大変でしたが、いい勉強になりました。日本語の厚みという意味では、私は浅い、浅瀬で今まで遊んでいたのだと、百人一首を知ることでいろいろなことに気づかされました。

菅野▼そういえば、百人一首で『永遠に来ないバス』は、例えば藤原定家の「来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに」と通じあうところがありますね。

小池▼「焼くや藻塩の身もこがれつつ」。さらっと出てくるところが厚みですね、パッと連想させる文学の歴史性というか。楽しいですね、『ゴドー』から定家まで連想が広がっていく。ずっと「待つ」のテーマはありますね。

菅野▼それを形而上的に昇華させたのが小池さんの詩、ということにしましょう。百人一首の翻訳で一番苦労なさったのは何ですか。

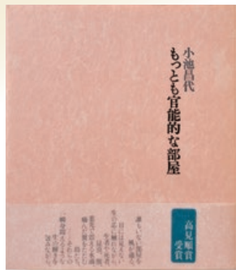
小池▼一番大きい苦労というと、百首はただ漠然と並んでいるわけではなく、連関がありながら微妙に時代を隔てて並んでいることが見えてくるまでが難しかったです。作者同士が微妙に関係しながら、歌と歌が関係しながら、あるいは万葉集の頃に遡り、この歌とこの歌はどういう関係にある、と。その体系の中で一首を見ていくところに至るまでが大変でした。一首がいきなり出てきたわけではないということですよね。それから、以前に大岡信さんも百人一首をただの現代語訳ではなく現代詩として訳されていますが、行分け詩として面白く読めるものにするのも大変でした。大岡さんのお仕事の偉大さが分かりました。

菅野▼訳されてみて、あえて順番をつけると何が一番いい歌と思われましたか。

小池▼どれと言えないぐらい、幾つもあります。地

『コルカタ』
思潮社 2010年

『現代詩文庫　小池昌代詩集』
思潮社 2003年



『もっとも官能的な部屋』
書肆山田 1999年

『永遠に来ないバス』
思潮社 1997年

味な叙景歌、風景を詠んだ歌もすごくいいなと、「朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木」のような。

菅野▼今あげていただいた藤原定頼の叙景歌は僕も好きです。百人一首の中でイメージが一番明確な作ではと思います。

小池▼仰るとおり、スーッと向こうのほうに奥行きが見えてきて、霧の向こうにさらに網代木が見えてくる。

菅野▼段階的に夜が明け、風景が次第に拡がってくる。時間、空間の推移が統合された、とても鮮明なイメージだと思います。本当の情景か想像かは別として。

小池▼和歌とか俳句でも、瞬間を切り取って写真か絵のように動かないものとして詠んでいると思い込んでいましたが、一句、一首の中で移り変わって動いています。詠むとそこから霧があふれて、三次元で風景が動いて、ビデオか映画みたいに動いて見えてくる。生きているなと思いました。ところで、私からの質問ですけど、こういう古典和歌や古典詩歌は、ご専門の近代のフランス文学、フランス詩の研究に結びつくことはございますか。

菅野▼僕はフランス象徴詩が専門と称していますが、多少あります。特に『新古今和歌集』には、定家、俊成にしろ、象徴詩のような歌がかなりあります。言葉でとても言い表せないものってやはりあるのでしょうね。

小池▼あります、あります。

菅野▼僕は詩人ではないので、小池さんのような詩人に「あります」と保証していただければ心強いですが、言葉では言い表せないものを何か別の具体的なもので象徴する。その具体的なものが全てを表せるわけではないですが、それでもある程度アプローチできるのです。青空でもって、理想とか、人間精神の広大さとかを表すのが一番単純な象徴の方法ですが、それに類似した象徴性は、新古今の定家などの歌の中にもあると思いますね。それで、日本人がフランスの象徴詩に関心を持つのがよく分かった、と言ったフランス人がいました。

小池▼なるほど、面白いですね。象徴詩と定家。

菅野▼そういう意味では、万葉集とつながることはない。大伴家持は、柿本人麻呂に比べれば随分近代的ですが、そこまでは行きませんね。

小池▼少し話がずれるかもしれませんが、アルチュール・ランボーがずっと分からなくて、こんな詩のどこが面白いんだろうと思っていました。でもある時、「永遠が見つかった」(『永遠』)という詩が、「永遠」という概念を古今東西いろいろな詩を読んでようやく分かってきました。日本の古典や、アメリカのディキンソンの詩にも永遠の概念がよく出てきまして、いろいろくぐり抜けた中でランボーにたどり着くと、ふと分かった気がします。海のキラキラしたところに太陽の光が当たっていて、ある意味では具体的なワンシーンから何か象徴的なものを抜き取ってきたのかなとも。私は、百人一首で源実朝の「世の中は常にもがもな渚漕ぐ海人の小舟の綱手かなしも」が好きで、海の彼方のキラキラしたのを実朝が見ていたような印象をいつも持ちます。

菅野▼世の中の無常という、そういう世の在り方とつながっていて、やはり一種の象徴詩のようですね。海人の小舟の綱手というのは分かりますけど、それを上の句とどういうふうに連結して読むかが難しいところじゃないでしょうか。

小池▼海人の小舟とか、綱手かなしもという言葉自体は本歌として他にも出ているようですが、上の句と下の句をあのように組み合わせたのは実朝のオリジナル。遙か彼方の海を、鎌倉の海を見ながら、綱手が哀しいという。哀しいというのも今の哀しいとはまたちょっと違いますけどね。

菅野▼実朝の歌としては珍しいですね。『金槐集』の中でもある意味難しい。大体は万葉ぶりでしょう。箱根の山を越えてきたら向こうに伊豆の海や島が見えたとか、大ぶりな叙景感がある歌が多いから。

小池▼素直な詠みぶりですが、確かに万葉ぶりというより、近代的でそこにひかれたのかもしれません。それにしても、菅野さん世代の方の教養の幅は広くて、すごい。詩歌というのは、長い時間をかけて読んでいくものだなと思います。私のように年を取ってからようやくランボーということもあります。何がひっかかってくるかは、分かりません。ランボーと実朝が重なったりするとすごく面白くて。年を重ねるのも悪いものではないなと。

『コルカタ』の話し言葉

菅野▼コルカタ、僕は古いからカルカッタと言いますけど、どのぐらい行っておられたのですか。

小池▼2週間ぐらいです。NHKの番組で、世界一人々がひしめく都市というテーマでコルカタへ。通訳の方も付いて、観光では行けないようなディープなところに行きました。ショックな場面も随分見て、現地では書けず、帰ってしばらくしてから一気に書きました。

菅野▼もう一つ、小池さんの詩の特徴は話し言葉の挿入ですね。それも乱暴な話し言葉をうまく使われる。『コルカタ』の中の詩(「はいどろふぉびあ」)で、狂犬病の恐怖にとりつかれて、帰ってからまたその恐怖がとりついて、なかなか離れない。最後に、「いいかげんにしろよ!」という一行で終わる、この「いいかげんにしろよ!」がすごく効いていますね。他の詩でも、「〜だわね」と、後にパッと付けたり、そういうところがとても上手だと思いました。

小池▼『現代詩文庫　小池昌代詩集』の解説で、飯島耕一さんに本当に無口と書かれていた時代から、だんだん開けてきて、自分を出せるようになって、まさにこういう言葉が出てきました。

菅野▼自然体になってということかもしれませんね。とても活きています。以前は文学的な評価として文体が一つに統一されることが重んじられましたが、散文でも詩でも、今はいろいろ組み合わせるのがごく普通になりました。けれど、組み合わせが下手だとどうしようもない。

小池▼あまり考えないで書いているので、うまくいっているといいですけど。

小説の神、詩の神

菅野▼小説のお話も伺います。小説はいつ頃から書かれていたのですか。『厩橋』を拝読しましたが、とても面白かったです。樋口一葉の『たけくらべ』のパロディのようにも感じられて。

小池▼ありがとうございます。小説の前に、『感光生活』というエッセイを書いていたら、途中からフィクションがどんどん入ってきてエッセイが書けなくなってしまい、それで小説にしちゃおうと。小説を書き始めたのは2002、3年ごろです。

菅野▼小説を書こうというお気持ちはずっと持っておられたのですか。

小池▼散文は、私はむしろ出発点でした。絵を描いても、散文を書いても、詩という概念を捕まえるには何でも良かったのです。最終的な獲物は詩だったので。行分けの詩にはこだわりがなく、むしろ、梶井基次郎とか、散文で詩の仕事をしている作家にすごく興味がありました。だから小説を書きたかった。ですから、全然違和感はなかったです。

菅野▼梶井基次郎の『檸檬』は小説だとお思いになりますか。

小池▼散文詩と言ってもいいのかもしれませんね。

菅野▼むしろ散文詩。芥川の『蜜柑』などもそうですね。日本ではある種の小説は散文詩と考えるほうが分かりやすいですね。

小池▼芥川龍之介の短編は結構散文詩になる、なっていると呼んでもいいものがたくさんありますね。面白いですね。

菅野▼他にはどんな作家のものに関心を持ってお読みになられましたか。

小池▼自分の資質は長編より断然短編でしたので、若い頃は本当に短編作家に興味がありました。岡本かの子、芥川龍之介、川端康成も好きでした。しかし、年とともに長いものも好きになって、滅茶苦茶なものも好きになってきて、ガルシア・マルケスの『百年の孤独』のようなスケールの大きいもので世界が広がっていった感覚がありますけれど、本当に自分は狭い、小さなところから始まったと思います。書き始めたのも散文詩みたいなところからで、それは資質として私の限界だと思います。小説はやっぱり難しい。本当に困難だと分かっていますので、逆に挑戦したい、自分の限界を越えたい、どうしてもやりたい、書きたいのです。

菅野▼これからも詩と小説と両方並行してお仕事を続けられるわけですね。

小池▼ただ、小説は書きたくてもうまくいかなくて、詩は歌いたい、けれども非常に散文的になっているところもあります。大岡信さんも晩年に、歌えないから語るしかないと、詩集(『旅みやげにしひがし』2002年)の中で語っていらして、その気持ちが痛いように分かります。私も歌いたいけれど歌ってどういうものだっただろうと、ひばりが歌えなくてキーッとなっているような状態で詩を書いている気がします。でも、血が滲んだのどで歌う詩でもいいじゃないかと思っています。詩のことをずっと考えている1週間というのがあると、詩は書けるのです。小説をずっとやっていたり、散文をべったりやっていると、詩を忘れてしまって本当に書けないのです。

菅野▼詩をずっと1週間考えるといろいろな詩句、フレーズが出てくるのですか。

小池▼そうです。詩は人にものすごく贅沢なことをさせるというか、四六時中詩のことを考え、体も詩のリズムにし、歩く時も詩のリズムのような感じで。詩は、人生を詩で染め上げるとようやく一行がひょっと出てきたり、書けるようになったりするのですが、そうしていないと、詩の神様は詩を書かせてくれないようなところもあって。

菅野▼若い時とは違いますか。

小池▼若い時はそういう意味では詩に染められていました。知らず、知らずのうちに。詩百パーセントで。

菅野▼向こうが来てくれたわけですね。

小池▼こちらもいつも詩のことを考えていますので。その後、小説や散文を書いたり、忙しい毎日を送りながら、すっかり雲の通い路みたいなものが無くなっていました。それがここ1年ぐらい、少し戻ってきたかなという感じはあります。

菅野▼永遠に来ないわけじゃなく、やっと来てくれた。詩と小説は同時に書けるのですか。

小池▼切りかえが難しくなってきました。ですから、私もずるい人間で、小説を書いている時は、私は詩をやめますので小説を書かせてください と小説の神様にお願いするわけです。そして詩を書く時には、詩の神様に、私は小説など書きませんので詩を書かせてくださいと。今はそういう意味では苦しい時期におりまして、小説を書くには詩をやめなくちゃいけないのだろうと思います。

菅野▼小説でも題材はお持ちでしょう。「脂の乗りきった」という言い方がありますね。小池さんは今、そういう感じを受けます。経験が熟して、小説も詩も頂点に来ている時期だと思います。女性の作家のホープですから、応援しています、どうか頑張ってください。

小池▼本当にありがとうございます。今日はとても楽しいお話でした。

[2017年5月25日　世田谷文学館館長室にて]

資料受贈報告　2017年2月1日〜6月21日

▼青池保光様　秋川ハルミ様　石井洋詩様　伊藤昂大様　浦城幾世様　岡玲子様　小川晴子様　奥山篤信様　小野塚力様　鈴木洵様　田村信雄様　塚田吉昭様　野上富子様　日高のぼる様　平野千里様　丸山由生奈様　宮崎潤一様　武藤剛史様　明峯明子様　安井浩司様　山崎辰見様

▼志賀直吉様　志賀直哉著作権管理代表者志賀道哉様

▼赤磐市教育委員会熊山分室　足立区郷土博物館　池波正太郎真田太平記館　えこし会企画編集室　小樽文学館　賀川豊彦記念松沢資料館　学習院大学史料館　紙の博物館　川崎市市民ミュージアム　北九州市立文学館　北九州市立松本清張記念館　舷燈社　高知県立文学館　江東区砂町文化センター　國學院大學博物館学研究室　国文学研究資料館　高志の国文学館　駒澤大学禅文化歴史博物館　埼玉文芸家集団　斎藤茂吉記念館　佐倉市立美術館　集英社　上越市文化振興課　昭和女子大学光葉博物館　白百合女子大学言語・文学研究センター　高遠書房　たましん歴史・美術館　多摩美術大学芸術人類学研究所　鶴書院　東京子ども図書館　東京都江戸東京博物館　東京都現代美術館　徳島県立文学書道館　豊島区文化デザイン課　長塚節文学賞　新美南吉記念館　西尾市岩瀬文庫　日本近代文学館　日本トルストイ協会　沼津市芹沢光治良記念館　「ふくい風花随筆文学賞」実行委員会　ふくやま文学館　文化書房博文社　文京区立森鷗外記念館　北海道立文学館　前橋文学館　松山市立子規記念博物館　岬の分教場保存会　三島市郷土資料館　南相馬市埴谷島尾記念文学資料館　武蔵野ふるさと歴史館　名都美術館　横浜市史資料室　与謝野晶子倶楽部　米沢市上杉博物館　立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

▼「新しき村」「阿房芋」「いのちのふる里」「宇宙風」「海」「かねこと」「くさくき」「九品仏川柳会句会報」「群系」「原型富山」「山暦」「樹木」「抒情文芸」「川柳研究」「双鷲」「鑿」「玉川台つれづれ」「多摩のあゆみ」「短歌人」「丹青」「地中海」「飛火」「日」「プチ★モンド」「文藝飯能」「未定」「ゆく春」「横光利一研究」「ランブル」の各誌ほかより資料のご寄贈、ご協力いただきました。ありがとうございました。

(五十音順・団体名敬称略)

企画展

澁澤龍彦
ドラコニアの地平

10月7日(土)～12月17日(日)

フランス文学者であると同時に、翻訳、評論、エッセー、小説と多彩な執筆活動を展開した澁澤龍彦(1928-1987)。没後30年を迎える本展では、今なお幅広い読者をもつ綺想の作家の創作と足跡をあらたな視点から総覧します。

サドをはじめとする異色の文学を出発点とする澁澤は、広大な書物の渉猟から多くの作品を生みだし、1960年代以降の日本の芸術文化に影響を与えました。澁澤独自の文学表現活動を「澁澤スタイル」と位置づけ、転機となったエッセー集『夢の宇宙誌』、代表作『高丘親王航海記』など300点を超える草稿・原稿や創作メモ類の自筆資料、愛蔵の美術品やオブジェ、和洋の蔵書などから、その表現活動の背景と博物誌的世界の魅力に迫ります。

澁澤龍彦　1976年

書斎　撮影:原田 寛

■ 関連イベント

☆ 連続講座「夢と綺想の球体 澁澤龍彦」(後期)

澁澤龍彦の文学世界の全貌を、各界の論者が多彩な切り口で語ります。2月に世田谷美術館で開催した同講座の後期・完結編です。

10月21日(土)　巖谷國士(仏文学者・本展監修者)
10月28日(土)　養老孟司(解剖学者・東京大学名誉教授)
11月4日(土)　池内紀(独文学者・エッセイスト)
時間:14時 ～15時30分　会場:世田谷文学館 1階文学サロン
定員:150名　参加費:各回500円

☆ 澁澤龍彦をめぐるトーク「榎本了壱×四谷シモン」

近年、澁澤龍彦の長編小説『高丘親王航海記』全文を繪巻、圖繪、書写で表現した榎本氏と、1960年代から澁澤と交流の深かった四谷氏によるトークイベント。

11月12日(日)　14時～15時30分
出演:榎本了壱(アートディレクター)、四谷シモン(人形作家)
会場:世田谷文学館 1階文学サロン　定員:150名　参加費:500円

【申込方法】
各イベント開催日の2週間前までに往復ハガキにて、① 講座名(連続講座の場合は開催日・講師も) ② 参加者全員の氏名・住所・電話番号 ③ 返信面に氏名・住所を明記(連名の場合は代表者のみ)のうえ、世田谷文学館「澁澤龍彦展関連催事」係までお申し込みください(1開催日につき1枚、2人まで連名申込可)。応募者多数の場合は抽選となります。結果は締切後、返信ハガキでお知らせします。

☆ 朗読会「澁澤龍彦 ── この異なる物語世界を読む」

『高丘親王航海記』をはじめ異相・異様の物語を紡ぐ短編小説から。

11月24日(金)　13時30分～15時45分
出演:声を楽しむ朗読会　司会・解説:福島勝則(多摩美術大学名誉教授)
定員:当日先着100名　参加費:無料

☆ サロン展示「榎本了壱コーカイ記」

アートディレクターの榎本了壱氏が2016年に発表した『高丘親王航海記』をもとに制作した圖繪、書写の一部をご紹介します。

会期:10月7日(土)～12月17日(日)
＊当館催事により展示スペースをご覧いただけない場合もあります。
会場:世田谷文学館 1階文学サロン
＊参加自由、観覧無料

☆ 澁澤龍彦セレクト書店

澁澤龍彦をテーマにした2日間だけの古書市を開催します。世田谷松陰神社前の古書店「ノストスブックス」店主のセレクションによるドラコニア・ワールドをお楽しみください。

12月9日(土)・10日(日)　10時～17時
会場:世田谷文学館 1階ロビー

『高丘親王航海記』
1987年 文藝春秋

当館収蔵品のご紹介58

福田純監督書き込み入り『ゴジラ・エビラ・モスラ 南海の大決闘』台本

ゴジラ、エビラ、モスラ三大怪獣激突の『ゴジラ』シリーズ第7作

TM & ©TOHO CO., LTD.

東宝特撮怪獣映画『ゴジラ』シリーズの貴重な台本の一部が、世田谷文学館に所蔵されています。本作の監督は、それまでの本多猪四郎から交代した福田純。『電送人間』をはじめとする特撮映画や若大将シリーズなど、多様なジャンルを手がけた福田監督の台本は、ご親族のご厚意で当館に寄贈されています。製作(プロデューサー)は、後に『日本沈没』(1973年)で大ヒットを記録する田中友幸。音楽は伊福部昭とともにシリーズを支えた佐藤勝。関沢新一のシナリオと山田一夫の撮影によって、作品全体が、それまでの重厚な作風から、より軽快なテンポの場面展開と洒落た台詞回しに仕上がっています。特技監督には円谷英二、美術は北猛夫と井上泰幸が担当し、ミニチュアセットが精巧に作り込まれました。主演は、『ゴジラ』シリーズ出演4回目の宝田明です。

「ヤーレン号」遭難場面から最後の場面まで描き込まれている。 TM & ©TOHO CO., LTD.

レッチ島 あんない図

まず、製作スタッフが書かれたページのあとに、台本の進行番号と対応した作品の舞台「レッチ島 あんない図」が付録のように貼り付けられているのが特徴的です。この図を見れば、島の地形、秘密基地や港の位置、登場人物や怪獣が暴れまわった経路がよくわかります。

しかも、「福田組」「円谷組」と表記され、この図がドラマパートと特撮パートの撮影進行に大きな役割を果たしたことが想像できます。

また、すべてのページに福田監督による絵コンテの描き込みがあり、注目すべきは、青いボールペンと黒い鉛筆の2種類の絵コンテが綴じられているところです。

青いボールペンの絵コンテは、人間同士の会話を中心としたドラマパートがサラサラと大胆な表現で描かれています。ゴジラやエビラの動作にも細かい指示が入っており、一行ずつ絵コンテと紐付けされて、台本の上半分に描かれています。こちらは、監督自身が自分のために描き込んだと思われます。

もう一方の黒い鉛筆で描かれた絵コンテ(右下の画像参照)は、トレーシングペーパーを使って貼り付けられ、台本とは別にじっくり時間をかけて検討されたようです。

例えば、黒い鉛筆で描かれた「荒れ狂う夜の海上(セット)」というシーンは、主人公達が乗り込んだヨット「ヤーレン号」が嵐で遭難した際に、突然、大きな鋏が海から現れ、乗組員が海に放り出される場面です。

絵コンテには、遭難する乗組員の表情や服装・仕草や、海のうねり・雷雲など天候の変化まで細かく描かれており、映画では人間と怪獣(エビラ)の対比や、抗うことのできない絶対的な力の関係が見事なカメラワークで表現されました。特に画面が水面に浮かぶヨットと同じように上下にゆっくり揺れ、真っ黒な海から現れた艶のある巨大な鋏を男4人が見上げる場面が印象的です。ゴツゴツした濡れた鋏と男達のライフジャケットが同じ光沢を放ち、特撮技術の粋が結集した映像に仕上がっています。

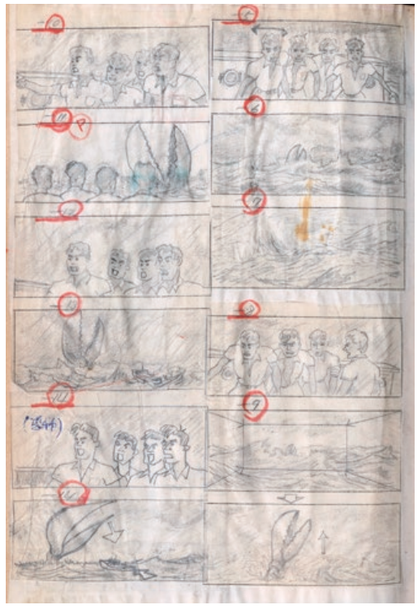
子どもから大人まで楽しめるエンターテイメント作品

エビラは、名前の通りエビをモチーフにしたリアルな造形を持ち、テッポウエビのように右の鋏は大きく、左には小さい槍のような鋏を持っています。悪の組織から逃走した島民を捕食する場面では、エビラが鋏を器用に使う生き物らしい演出があります。

しかし、このような特撮怪獣映画の「恐怖」や「絶望」という要素とは対照的に、ゴジラとエビラの大岩のキャッチボールや、ゴジラがヒロイン「ダヨ」に興味を示す場面などからは、人間味や愛嬌が感じられます。

この映画が公開された1966年は、『007サンダーボール作戦』が話題となった年でした。「秘密結社のアジトに潜入する」「核兵器開発を阻止する」という、スパイ映画を匂わせるドラマパートをとり入れ、未開の地や南海の孤島を舞台に、怪鳥・大コンドルの奇襲など福田監督らしいエンターテイメントを盛り込んだ本作は、12月公開の年末映画として子ども達の話題になりました。

この台本は、10月7日から始まるコレクション展「SF・再始動」で、紹介します。乞うご期待！



黒い鉛筆で描かれた絵コンテ
TM & ©TOHO CO., LTD..

2016（平成28）年度 世田谷文学館事業報告

2016年度は下半期に大規模改修工事を行い、空調・電気設備を一新したほか、館内のスペースを一部リニューアルした。工事にともなう様々な検討は、今後の世田谷文学館のあり方を考える好機ともなり、その意味において、館の歴史の節目となる一年となった。また、約半年の休館期間中、事務所を外部に移転したこともあり、例年以上に館外での事業に注力した一年となった。

「上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展」は、2014年に国際アンデルセン賞を受賞し、世界的な評価も高い作家の物語世界を紹介する、初めての大規模展。同時期に〈精霊の守り人〉シリーズがテレビドラマ化されたこともあり、10代末満から80代以上まで、幅広い年齢層が来場する展覧会となった。NHKサービスセンターとの共同企画として起ち上げた本展は、当館での会期終了後、全国各地の博物館を巡回している。

「生誕100年　映画監督・小林正樹」展は、カンヌ国際映画祭で審査員特別賞を受賞した『切腹』、『怪談』や、太平洋戦争をテーマにした超大作『人間の條件』などにより、国内外で高く評価されてきた小林正樹の作品世界を、当館に寄贈された膨大な資料によって構成した回顧展。俳優の仲代達矢ら関係者によるトーク&上映会も実施し、生誕100年・没後20年記念事業の柱のひとつとなった。

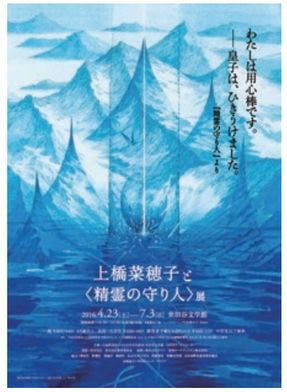
コレクション展は「作家たちの戦中・戦後」と題し、前年度に収蔵品に加わった、中野重治の昭和10年代の作品原稿や、堀文子が壺井栄の作品集のために描いた挿画原画を初公開した。

また、約半年間の休館中、「上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展」のほか、「岡崎京子展」「浦沢直樹展」「ミロコマチコ展」など、当館が企画協力した複数の展覧会が全国を巡回した。

子ども文学館プログラムは「どこでも、だれでも、いつでも」を活動の指針とし、館内にとどまらず、学校や区民施設とも連携しながら展示やワークショップを展開した。「どこでも文学館」事業では、区立中央図書館や群馬県川場村（区民健康村）における長期展示を実施したほか、映像制作ワークショップ「ワン・ミニット・ムービー〜冒険物語をつくろう！」などの、新たなプログラム開発にも取り組み、好評を得た。「だれでも文学館」事業では、だれもが気軽に楽しめる文学館の活動を、ボランティアとともにつくりあげるプログラムを実施。中学生から大学生までのべ98名がボランティアスタッフとして活躍した。

フライヤー

企画展「生誕100年　映画監督・小林正樹」



企画展「上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展」

どこでも文学館（秋）

どこでも文学館（夏）

菅野昭正館長がプロデュースする連続講座は、2017年度に開催する「澁澤龍彦展」のプレイベントとして企画し、休館期間中に世田谷美術館の講堂で行った。

古本と雑貨の蚤の市「セタブンマーケット」は、前年度に続き2回目の開催。地域の町会が主催し、毎年館の周辺で催すイベント、「烏山下町まつり」との同日開催にしたことで、多くの近隣住民が来場した。テーマ設定を「上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展」とリンクさせたことによる相乗効果もみられた。

「セタブンマーケット」の背景にある、地域の博物館として本を中核に据えながら新たな交流の場を作るという理念は、2017年度にリニューアルオープンしたライブラリー「ほんとわ」のコンセプトにも継承された。ライブラリーの日々の運営と本事業を始めとする大小の活動を通して、理念の実現を目指していきたい。

「セタブンマーケット2016」

連続講座「夢と綺想の球体 ― 澁澤龍彦」

2016（平成28）年度事業一覧

1　展覧会

展覧会名	会期	日数	一般観覧料（円）	観覧者数（人）
◎コレクション展				
（前年度からの継続）「戦後70年と作家たちII」	4/1-4/3	3日	200円	8,582
作家たちの戦中・戦後	4/23-9/15	124日		
◎企画展				
上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展	4/23-7/3	61日	800円	11,065
生誕100年　映画監督・小林正樹	7/16-9/15	53日	800円	2,677
展覧会観覧者数合計				22,324

2-1　イベント：展覧会関連

開催日	内容	参加者数（人）
◎「上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展」関連イベント		
4/23	「上橋菜穂子さんとふれ合うひと時」 講師：上橋菜穂子（作家）	168
5/22	「バルサになるさ！」 講師：須藤正男（CONE指導員・みどりの寺子屋代表）、角銅真実（音楽家）	30
6/11	「バルサの食卓　対談」 講師：平松洋子（エッセイスト）、西村淳（南極料理人・作家）	158
6/12	「バルサの食卓　現代編」 講師：千松信也（猟師・作家）	171
6/26	ギャラリートーク 講師：上橋菜穂子（作家）	156
◎「生誕100年　映画監督・小林正樹」関連イベント		
7/16	上映会『この広い空のどこかに』 アフタートーク出演：石濱朗（俳優）	69
7/23	上映会『怪談』	86
7/30	上映会『東京裁判』	92
8/7	上映会『切腹』 アフタートーク出演：仲代達矢（俳優）、春日太一（映画史・時代劇研究家）	145
8/28	「戦争の語り部お話し会」 講師：鈴木忠典（元兵士）	40
9/4	「戦争の語り部お話し会」 講師：遠藤尚次（抑留体験者）	37

2-2　イベント：子ども文学館

開催日	内容	参加者数（人）
◎どこでも文学館（展示）		
通年	区立小中学校、区立図書館、区民センター、世田谷区民健康村（群馬県川場村）など20件	103,947
◎どこでも文学館（催事）		
7/29	施設見学「先端かつ最新の科学技術を学び、将来を考えよう」 講師：澤田健一郎（JAXA）	19
8/6	出張ワークショップ「超ショートショート講座」 講師：田丸雅智（作家） 会場：桜丘区民センター	53
11/20	出張ワークショップ「超ショートショート講座」 講師：田丸雅智（作家） 会場：奥沢区民センター	37
11/21・22・24	出張ワークショップ「芦花小学校＋大竹英洋ワークショップ」 講師：大竹英洋（写真家） 会場：蘆花恒春園、芦花小学校	延べ455
1/29	出張ワークショップ「ワン・ミニット・ムービー〜冒険物語をつくろう！〜」 講師：北阪昌人（脚本家）、本田友美（教育と探究社） 会場：池尻まちづくりセンター	17
◎だれでも文学館（ボランティアプログラム）		
4/23、5/22、6/11・12	「春ボラ　用心棒募集中！」	42
6/5、7/23・26、8/16・17、10/14・26・27・28、2/2・23・24	「日々ボラ　学芸員募集中！」	34
8/6・7	「夏ボラ　映画人募集中！」	22
◎だれでも文学館（催事）		
8/23	「からだのことば」 講師：日本女子体育大学ダンス・プロデュース研究部	25

2-3　イベント：セタブンマーケット、連続講座

開催日	内容	参加者数（人）
6/4	セタブンマーケット2016	2,745
◎連続講座「夢と綺想の球体―澁澤龍彦」		
2/4	「澁澤龍彦の宇宙誌」 講師：巌谷國士（仏文学者、展覧会監修者）	143
2/18	「澁澤龍彦の想像の画廊」 講師：酒井忠康（世田谷美術館館長）	102
2/25	「澁澤龍彦と70年代の高校生」 講師：中沢けい（作家）	84

2-4　イベント：学芸員実習、活動支援・共催事業

開催日	内容	参加者数（人）
7/26-7/31	博物館学芸員実習（6日間）	5
通年	区内生涯学習グループの展覧会見学、区民センター・区内を拠点とする企業OB会への出張講座、巡回展会場でのレクチャーを実施した。	276
通年	本年度で6回目（最終回）となる多摩美術大学との共同研究「清水邦夫の劇世界を探る」の実施、友の会との共催イベントを行った。	345

3　ライブラリー・講義室・絵本コーナー

施設（4/1〜9/15）	利用者数（人）
ライブラリー	3,128
講義室	1,439
絵本コーナー	7,997

4　第5回世田谷芸術アワード“飛翔”

募集部門	小説・童話
応募点数	3

5　文学資料収集・保管（点数）

新収蔵点数	0
2017（平成29）年3月31日現在の収蔵品数	98,487
特別観覧件数（撮影点数）	28
収蔵品の貸付点数	234

＊2016（平成28）年度 助成・協賛

［助成］平成28年度 文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業／芸術文化振興基金

［協賛企業・団体］株式会社ウテナ／東邦ホールディングス株式会社／昭和信用金庫／世田谷信用金庫／株式会社ベネッセスタイルケア 芦花翠風邸／烏山駅前通り商店街振興組合／JA東京中央

6　刊行物

タイトル	判型／頁数	頒価（円）
◎世田谷文学館ニュース		
第63号4月 館長の作家対談：鷹羽狩行（俳人） 収蔵品のご紹介：寄稿「驚きの肉筆原稿出現―中野重治の転向連作と鷗外論」林淑美	A4/12	無料
第64号8月 館長の作家対談：鴻巣友季子（翻訳家） 収蔵品のご紹介：寄稿「ムットーニのからくり劇場」武藤政彦	A4/12	無料
第65号3月 館長の作家対談：柴田翔（作家） 特集：世田谷文学館全館改修工事とリオープン	A4/16	無料
◎展覧会図録		
『上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展』（NHKサービスセンター発行）	A4変形/130	1,500
『生誕100年　映画監督・小林正樹』	A4変形/136	1,200
◎報告書		
どこでも文学館2016報告書	A5/16	無料
だれでも文学館活動記録	A6/8	無料

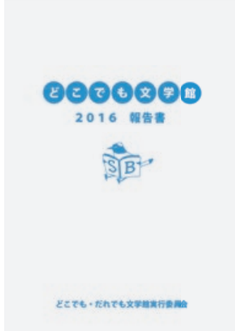
7　年間来館者数

※一部イベント参加者は含まず

141,150人

刊行物

「だれでも文学館」活動記録



「どこでも文学館2016」報告書

「生誕100年　映画監督・小林正樹」図録

「上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展」図録

展示風景

企画展「上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展」

企画展「生誕100年　映画監督・小林正樹」

企画協力した展覧会

「ミロコマチコ　いきものたちの音がきこえる」(12/1-12/25　美術館「えき」KYOTO)

コレクション展「作家たちの戦中・戦後」

子ども文学館

どこでも文学館　出張ワークショップ「超ショートショート講座」(8/6　桜丘区民センター)

どこでも文学館　出張展示「新 宮沢賢治幻想紀行」(9/30-12/21　区立中央図書館)

どこでも文学館　出張ワークショップ「ワン・ミニット・ムービー～冒険物語を作ろう！」(1/29　池尻まちづくりセンター)

どこでも文学館　出張ワークショップ「芦花小学校＋大竹英洋ワークショップ」(11/21, 22, 24　都立蘆花恒春園、区立芦花小学校)

だれでも文学館　ことばのミュージアム「からだのことば」(8/23　世田谷文学館)

イベント

連続講座「夢と綺想の球体 ― 澁澤龍彦」 講師：巖谷國士（2/4　世田谷美術館講堂）

「セタブンマーケット2016」(6/4　世田谷文学館)

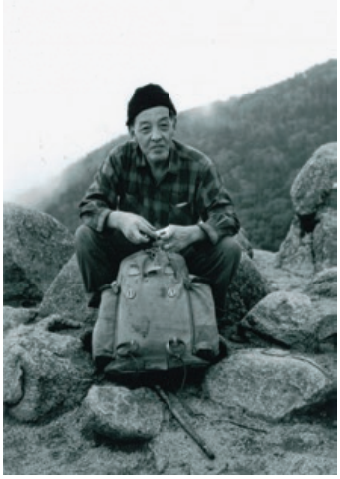
企画展

山へ！ to the mountains展

7月15日(土)～9月18日(月・祝)
2階展示室

観覧料：
一般
800(640)円
65歳以上・高校・大学生
600(480)円
障害者手帳をお持ちの方
400(320)円
中学生以下無料

＊( )内は20名以上の団体割引
＊7月21日(金)は65歳以上無料
＊8月11日(金・祝)「山の日」は無料



深田久弥 国師岳の頂上で 1964年 ©望月達夫

澁澤龍彦 ドラコニアの地平

10月7日(土)～12月17日(日)
2階展示室

観覧料：
一般
800(640)円
65歳以上・高校・大学生
600(480)円
小・中学生
300(240)円
障害者手帳をお持ちの方
400(320)円

＊( )内は20名以上の団体割引
＊10月13日(金)は65歳以上無料

ドイツ ベルリン動物園 サイの前で 1970年9月

	8月	9月	10月	11月
企画展	山へ！ to the mountains展 ～9月18日(月・祝)		澁澤龍彦 ドラコニアの地平 10月7日(土)～12月17日(日)	
コレクション展	コレクションにみる文学を彩る書画の魅力 ut pictura poesis ― 詩は絵のように ～9月18日(月・祝)		SF・再始動 10月7日(土)～2018年4月8日(日)予定	

コレクション展

コレクションにみる文学を彩る書画の魅力 ut pictura poesis ― 詩は絵のように

～9月18日(月・祝) 1階展示室

SF・再始動

10月7日(土)～2018年4月8日(日)予定

観覧料：
一般
200(160)円
高校・大学生
150(120)円
小・中学生、65歳以上・障害者手帳をお持ちの方
100(80)円

＊( )内は20名以上の団体料金
＊土・日・祝日は小・中学生無料

菅野昭正館長が第1回井上靖記念文化賞を受賞しました。
「長年にわたる文学的業績と世田谷文学館における企画運営」に対して贈られたものです。
5月20日に北海道旭川市で行われた贈呈式に菅野館長が出席しました。

休 館 日：
毎週月曜日(ただし月曜日が祝日の場合には開館し、翌平日休館)

開館時間：
10時～18時(展覧会入場は17時30分まで)

交通案内
京王線「芦花公園」駅南口より徒歩5分／小田急線「千歳船橋」駅より京王バス(千歳烏山駅行)利用「芦花恒春園」下車徒歩5分

公益財団法人せたがや文化財団
世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM
〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10
Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120
ホームページ http://www.setabun.or.jp/

せたがや文化財団の催し物

■ **世田谷美術館**
[Tel. 03-3415-6011]
改修工事のため、2018年1月12日(金)まで休館中

■ **世田谷美術館分館 向井潤吉アトリエ館**
[Tel. 03-5450-9581]
● 向井潤吉 1960's 民家遍歴
～12月3日(日)

■ **世田谷美術館分館 清川泰次記念ギャラリー**
[Tel. 03-3416-1202]
● 清川泰次 季節の情景
～12月3日(日)

■ **世田谷美術館分館 宮本三郎記念美術館**
[Tel. 03-5483-3836]
● 宮本三郎の描く身体
宮本三郎の顔・貌(かお)
FACES in Saburo Miyamoto's Art
～12月3日(日)

宮本三郎《(鏡の前の婦人像)》1945-48年頃

■ **世田谷文化生活情報センター 世田谷パブリックシアター**
[Tel. 03-5432-1515(チケットセンター)]
● 世田谷アートタウン 2017 関連企画
カンパニー XY『夜はこれから』
10月20日(金)～22日(日)
会場：世田谷パブリックシアター
演出・振付・出演：カンパニー XY

● 『管理人』
11月26日(日)～12月17日(日)
会場：シアタートラム
作：ハロルド・ピンター
翻訳：徐賀世子
演出：森新太郎
出演：溝端淳平 忍成修吾 温水洋一

■ **世田谷文化生活情報センター 生活工房** [Tel. 03-5432-1543]
● 「家電のある生活」展
9月18日(月・祝)～10月15日(日)
会場：生活工房ギャラリー、ワークショップルームA・B
● クライム・エブリ・マウンテン vol.1
「ミャオ族の刺繍と暮らし」展
11月11日(土)～12月10日(日)
会場：生活工房ギャラリー、ワークショップルームB

■ **世田谷文化生活情報センター 音楽事業部** [Tel. 03-5432-1535]
● 室内楽シリーズ 山崎伸子 チェロ・リサイタル
10月9日(月・祝) 15時開演 成城ホール

山崎伸子
© 武藤章

● 午後の音楽会
塩田美奈子のおはなしオペラ『蝶々夫人』
11月8日(水) 14時開演 成城ホール